

まんだら通信

第223号 (通巻258号)

平成27年01月 西暦2015年 佛暦2581年 皇紀2675年

安房国八十八ヶ所 第一番札所
295-0103 千葉県南房総市白浜町滝口1084
真言宗智山派 天神山 紫雲寺 高橋 龍沙
郵便振替 00120-2-43163 紫雲寺
TEL0470-38-4740/FAX 0470-30-5040
<http://www.shiunji.org/>
Mail post@shiunji.org



明けましておめでとーございませす

平成二十七年が始まりました。六日は小寒の入り、一昨日は七草がゆを戴きました。月日は否応なく過ぎて行きますが、何はともあれ元気に新しい年を迎えることが出来て何より有難いことだと思いません。

このお寺も、平安仏をお祀りしていることから分かる通り、千五百年近くの歴史があります。木像ですから雨や湿気が大敵です。長い間には食べるものに事欠くような場合も沢山あった筈です。

お檀家の皆さんが守りしたから、と言いたいところですが、檀家の形が出来上がったのは江戸時代になってからで、それ以前は地域とお寺の関係は自由でした。つまり、お寺の雨漏りを見て見ぬふりをして、どこからも苦情は出なかったということなんです。

にもかかわらずこうしてお寺があるということは、地域の皆さんの一方ならぬ思い入れがあった、という何よりの証拠だと私は思っています。

お寺の役目は、南方のお寺を見ていて分かるように、葬式・法事だけでなく普段の暮らしの相談相手です。あちらの国では、葬式法事は勿論ですが、一家の暮らし向きや子供の進学、夫婦親子の関係、ご近所とのつき合い方など、「こうすればうまく行くよ」という助言をするところです。

不思議なご縁で紫雲寺の住職になってから、ずっと考えていましたが、それには「かみしも袴を脱いだ私ってこんな人間です。」と分かってもらいうことが一番という思いから『まんだら通信』の発行を思い立ちました。平成八年七月が第一号ですから、もうじき二十年になります。結論めいたことを言うと、「お寺とお檀家は一つの家族」ということです。どんなことでも気兼ねなく話せる相手です。

呉々も忘れて欲しくないことは、まさかの時に一番先に連絡するところはお寺であって、葬儀社さんではありません。特に地元を離れているお宅はお気をつけください。お葬式の方法についても費用のことについても、順序を誤つたために後悔している人がおおいでです。ご親戚・ご近所にも是非お伝えください。電話番号

号はこの面の右上にあります。

戦後七十年

六〇年前の昭和二十七年、成田山で修行生活を始めた頃、たまの休日に京成電車で上野に着くと、戦災浮浪児が沢山たむろしていました。

このような風景は、日本には大都会にも田舎にもありませんが、世界を見渡すと、その日の食事に事欠く人々が、アジアにもアフリカにも沢山います。寧ろ増えているといつていいでしょう。

もともと働くことが大好きな日本人は、外国から「お前の国民は働きすぎだから、休日を増やせ」などと文句を言われながら、気がついたら世界第一のお金持ちの国になりました。

世界と日本、どこが違うのでしょうか。以前、アメリカのサミュエル・ハンチントンという学者さんが、世界の文明を区分けしたことがあります。『文明の衝突』うろ覚えですが、アフリカ文明圏、キリスト教文明圏、イスラム教文明圏、儒教の文明圏：と区分けしてみても、日本だけはそこにも入らない独自の文明を持つていることに気付き、仕方なしに（かどうかは分かりませんが）、日本文明圏という項目をたてました。

仲間の文明がないことと、西洋文明が一番と思つていた私は、何となく寂しい思いをしたことでした。

でも、「日本人が特別優れた民族」と、良い意味で称賛した人は、明治以来の外国人学者や外交官、文学者が沢山いたのです。戦時中、日本大使だったフランス人ポール・クロードルはそのものずばり「どうしても滅びて欲しくない民族がある。それは日本人である。」といいましたし、最近見たテレビで、ブラジルの日系人農場で働くあちらの人は「日本人は真つすぐだから信用できる。使用人の先になつて仕事をやる。だから大好きです。」といっていました。

お四国遍路の外国人が、「おせつたい」にビツクリ仰天してブログに書くと、それじゃあとお遍路さんが日本に渡つて来るのだそうです。

まんだら通信・あそか基金へのご援助有難うございませす

- 船橋安藤ふよ様 白浜吉田満寿雄様 白浜金房保様 白浜高田博様 館山山川紀代様 印旛平田八重子様 白浜山口七兵衛様 館山遍智院様 三宅島高松かず子様 横浜高山勝利様 船形小形博子様 館山芝田百合子様 館南妙典寺様 千葉市平島亨様 横須賀 吉田松夫様 館山福原織江様 白浜加藤和子様 千葉市古谷廣司様 白浜林趙様 東京浅沼進子様 富津市田中律子様 府中市加藤みつ子様 白浜木曾庄右衛門様 東京福原保子様 白浜由木尾晋様 葛飾鈴木重男様 横濱鈴木昇様 大多喜庄司清様 白浜藤井昭雄様 三芳溝口清様 横須賀鈴木世津子様 白浜早川一郎様 千倉黒川陽子様 三重光友勝美様 白浜岩澤梅子様 新潟慈眼寺様 鴨川 笹元鮎様 白浜林趙様 東京内田政子様 館山加藤石油様 岩井福田聖一郎様 白浜安田幸子様 白浜保田秀子様 和親医院様 館山平島信雄様 加藤和子様 富津大網昇様 埼玉平島具視様 鴨川佐藤恵重様 千倉長性寺様 丸山山野勝美様 白浜早川文枝様 千倉海雲寺様 千倉浅沼洋一郎様 白浜林恵子様 横濱海野守正様 横濱泉泉裕史様 白浜高木一康様 館山龍崎玲子様 船橋早川久夫様 館山早川春雄様 千倉川名子七様 鴨川古泉院様 東京高橋正夫様 館山佐藤清美様 鴨川海福寺様 館山山口角太郎様 横濱全米子様 丸山東光院様 丸山渡邊利昌様 白浜林泰治様 茨城野口君子様 東京内田政子様 アス力佛商丸淳一様 京都渡邊圭悟様 甲府曾雌芳典様 館山鈴喜屋様 東京土屋茂夫様 八街櫻井照子様 福島沼崎照夫様 その他、沢山の匿名で希望の皆様を初め、一年に何回もご支援下さる方々など、お陰様で発行を続ける何よりの励みになっております。本当に有難うございませす

にっぽん人情小唄 落語家 三遊亭鳳豊 第一〇八話 校舎

赤い夕陽が校舎を染めてく♪
この言葉が懐かしいと思われる方は、六十代後半の方でしょうかね。

これは、舟木一夫さんが歌つて大ヒットした「高校三年生」の歌い出しです。何を隠そう、実はこの私もよく歌いました、なぜなら、この歌が流行つた年に、高校三年生だったからです。ですから、私たちの同窓会の名前

「赤い夕陽の会」です。

その舟木さん、もう七十歳になったのに、まだこの歌をコンサートで歌っているそうです。その時の言葉、「赤い夕陽は、いつまで校舎を照らしているんでしょう。うまいですねえ。そうそう、あの「お客様は神様です」と言った三波春夫さんが晩年、毎年歌舞伎座でやっていたコンサートを中止された時、「なんでやめたんですか？」という記者の質問にこう答えたそうですよ。「ええ、神様が仏様になっちゃって……」さて、今日は、先日、おうかがいした山形のある小学校の校長先生のお話です。いえ、落語ではなく、PTAのお父さん、お母さん方や学校の先生方に私の現代人情書を直接聞かせたいとおっしゃってくださって、わざわざ呼んでくださったのです。

大村亨夫先生。山形県飯豊町立第一小学校の校長先生ですが、来年三月に定年を迎えられます。

「ええ、私がかこまでやれたのは、父兄の方々や仲間の先生たちのおかげですからね。そのお礼もあって、鳳豊さんを……」
そう言っていて、濃霧の赤湯沢で、新幹線を降りた私を迎えてくださいました。

先生は、新潟大学を出て教員生活に入られたのですが、小学校の先生になるのって大変なつてすね。ほら、中学や高校なら国語とか英語とか、専門分野が決まっていますけど、小学校はなんでもできなければいけない。
先生も学生時代、教員採用試験に合格するために、大変だったそうですよ。特に、音楽。ピアノが弾けなければいけません。先生はごく普通の学生さんでしたから、ピアノが上手なわけもない。受験前は、大学の音楽室に朝五時頃かから行って必死で練習したそうです。朝、早いのは、もう六時過ぎからだと言います。練習する学生たちがピアノの前で順番待ちだからです。そして、夏休みになると、実家に帰るのですが、家にピアノなんかありません。近くのお金持ちの家にお願いで、練習を続けたそうです。そして、「私は海の子」一曲だけマスターして、なんとかか

試験をクリアしたといえます。それから約四十年。

「いろいろ、思い出に残る生徒とかいるでしょう？」とお聞きすると、優しい眼差しでこう言われました。

「どの子も思い出に残っています。でも、私は普通の子を普通に育てようとしてきましたから、たいした教師ではありません」

いいですね。普通の子を普通に育てるって、いま、いちばんむずかしいことではないですか。

その大村先生が最後に赴任したのが、この飯豊町立第一小学校。四年前のことです。この小学校は、それまであった秋生小学校、中小学校、黒沢小学校が昭和四十六年に統合されて生まれた学校ですが、耐震のため、二年前に新校舎建設が決定、取り壊しがはじまりました。完成予定は、平成二十八年四月です。

ということは、大村先生は新しい校舎に入ることはありません。校庭脇に建てられた仮設のプレハブ二階建ての校舎で定年を迎えます。先生は、毎月発行している「かけはし」という学校だよりに、校舎が取り壊されることについて、こう書きました。

「新しいものに生まれ変わる時に、古いものは消えるという世の習いは承知のうえでも、目の前で葬られていく校舎を見送るのはさみしいものです。『老兵は死なず。ただ、消え去るのみ』という言葉をおぼえておきます」と。すると、校区にお住まいのおばあちゃんらしき人から先生宛に手紙が届きました。それには、「校舎も人の世も過ぎ去った人も、きつと見守っていてくれると思います」という温かい言葉が綴られています。

大村先生はうれしかったんでしょう。豪雨の中、車で小学校を案内しながら、私にこんな話をしてくれました。

「鳳豊さん、校舎は壊され、生徒全員が仮設のプレハブの校舎に入ることになったでしょう。私は、最初、『なんだ、この仮設の校舎は。こん

なプレハブで淋しく定年か。それも自分らしくていいか』と思っただけです。ところが、子供たちが移って来て歓声が聞こえ、授業の始まりと終わりを告げるチャイムが鳴ると、ここは学校なんですよ。学校って、場所じゃないんですね。建物じゃない。子供たちの明るい声が、歓声が聞こえるところ、たとえ、プレハブでも、運動場でも、砂場でも、そこが学校なんだ、そして、それを温かく見守っているのが父母であり、地域の人たちであり、そして私たち教員だから、いま、ここで定年を迎えることに誇りを持っていきますよ」

学校は、建物ではない。子供たちの歓声があるところ、放課後のチャイムが鳴るところ……。

ふと東日本大震災の被災者の皆さんが住んでいる仮設住宅を思い出しました。もし同じ敷地内に小学校や幼稚園があつたら、どれだけ心が温かくなるでしょうか。

そんな大村先生の最後のお仕事は、いったいなんだと思います？

それは、新校舎のデザインを選定することです。先生は、きれいに解体され、何もなくなつた校舎跡を見ながら教えてくれました。

「学校の裏手は、冬になると、飯豊山連峰の西山からのすごく冷たい風が吹いてくるんです。ですから、その風を逃がすために、山に向かった側が流線型になるような校舎が建つといいと思って、提案したんです。風に敢然と立ち向かう勇氣も必要ですが、風をかわし、逆に風を生かす知恵も人生には必要でしょう。せめて、そんな子に育ってほしいという私の願いを新校舎に残したいと思ひましたね」

町では従来の箱型校舎から、流線型を検討中だそうです。

「鳳豊さん、あの翌日から私たちの町は一面の銀世界になりましたよ。これであと四か月、雪との生活です。運動場に桜が咲く時は、私にもうこの学校にはいないと思いますが、どうぞ、お元気で」



でした。預金して記帳しましたので、花や線香、お灯明などの資金になります。▼灯台のすぐ下、松林の中に『白浜海洋美術館』があります。開設50年ですが、美術品の劣化を防ぐため、照明を新しくする資金を募集中です。地域にたった一つの文化施設。みんなで応援しましょう。▼今月の野草はタンポポ【キク科タンポポ属】。野に緑が全くない雪国から見れば、ホッと春の鮮やかな黄色ではないでしょうか。春夏秋冬、高い山や美しい海に恵まれ、メリハリのあるこの国に住む有難さを、つくづく思います。

2015.01.10 龍渉

く、食欲など私ごときは足下にも及びません。お食事はお住いを出て、必ず修行僧たちと一緒に食堂（じきどう）で、一汁一菜を召し上がっておいでさうです。

毎朝たっぷり1時間余りの勤行のあと、お参りの人たちへのご法話は、短い中に打ち解けた内容で、お世辞でなく心に響くお言葉に皆さん喜んでお帰りになると聞きました。▼お盆過ぎから年末までのおさい銭、幾らだと思ひますか。本堂と参道下のお地藏様の分が18,097円でした。元西福院があつた場所の馬頭観音石像などは、新道（にみち）の人たちがお守りしていますが、こちらの方は1,534

▼大晦日午前零時、今年も恒例の元朝護摩を焚きました。

宣伝が苦手のせいで、祈祷札のお申し込みは50人余りでした。いつも申し込んでいながら、すっかり忘れた方の分も、しっかりと作ってお祈りしました。お札を作るのもお護摩を焚くのもすべて手作りという、菩提寺ならではの功德です。

▼12月10日～12日、龍祐と二人ご本山の報恩講に行ってきました。12日は興教大師覚鑿（こうぎょうだいし・かくばん）上人のご命日なので、ご恩報じの大きな行事なのです。

お元気な寺田能化さまに久しぶりにお会いしました。95歳にお成りとかですが、澄んだお声は大き

余滴